

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和8年4月14日（火）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

学校名 伊藤学園

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【国語】

1 定着状況についての概要

分 類	2 年			3 年			4 年			5 年			6 年		
	目 標 値	校 内	全 国	目 標 値	校 内	全 国	目 標 値	校 内	全 国	目 標 値	校 内	全 国	目 標 値	校 内	全 国
基 礎	81.0	86.4	81.1	79.0	84.5	81.0	74.1	79.2	74.6	69.4	74.8	70.3	66.1	73.9	66.3
活 用	56.3	63.1	58.6	56.9	64.0	57.8	58.8	68.8	61.2	55.6	63.9	56.9	50.0	59.5	50.5

2 具体的な課題とその要因

2年	基礎、活用ともに目標値を上回っているが、問題の内容別正答率を見ると、「情報の扱い方に関する事項」が目標値を下回っている。共通な事柄、相違点、話の順序などを理解し、表現する力が身に付いていないと考えられる。
3年	基礎、活用ともに目標値を上回っているが、問題の内容別正答率を見ると、「文しょうを書く」が目標値を下回っている。自分の思いや考えが明確になるように文章を書く経験が少ないこと、事柄の順序を考えながら内容の大体を捉える手段がわからないことが要因として挙げられる。
4年	基礎と活用のどちらも目標値を上回っていた。しかし、「漢字を書く」の正答率は、目標値に達していなかった。日頃から行っている漢字テスト等の直しが不十分だったことが要因として考えられる。
5年	基礎と活用のどちらも目標値を上回っていた。しかし、「文章を書く」の正答率は、目標値に達していなかった。タブレット学習などで、簡潔にまとめる機会が増え、文章として書く機会が減ったのが要因と考えられる。
6年	漢字を書く問題で、正答率が目標値を下回った。日頃から漢字を書くことや文章を書く上で間違いや、読み直しをしないこと多くみられるが、直しがあいまいな部分があったことが要因として挙げられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

2年	共通点・相違点を色分けなどをして、文章から情報を正しく取り出すようにする。また、話の順序を表す言葉にはどんな言葉があるかを整理させ、苦手な児童には、具体的に示しながら支援をしていく。
3年	自分の思いや考えを文で表す活動を意図的に計画する。説明文の学習で事柄の順序を考える活動において、机間指導などをして、苦手な児童に対する支援を行う。
4年	漢字小テストを実施し、間違いがあった場合には確実に直しをさせることで定着を図る。文章を書く際には、習った漢字を必ず使うよう指導する。
5年	毎日の日誌をきちんと書かせたり、学習活動において箇条書きではなく文章で書かせたりするようにしていく。日々の生活の中で、文章を無理なく書いていく機会を多くもっていくことで「文章を書く」力を身に付けさせていく。
6年	漢字を学習する際に、熟語や分をつくるだけでなく、同音異義語なども一緒に調べる活動を取り入れる。また、なぜその漢字が使われるのか、漢字の意味をもとに考えられるよう促す。日頃から文章を書く活動を取り入れていく。また、毎日の日記で漢字の指導をしていく。

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【社会】

1 定着状況についての概要

分 類	4 年			5 年			6 年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基 礎	70.0	77.4	71.5	68.1	74.7	69.7	68.4	80.0	69.5
活 用	48.6	56.4	49.9	55.7	61.4	58.0	62.9	72.7	65.2

2 具体的な課題とその要因

4年	基礎、活用ともに目標値を上回る結果となった。問題の内容別に見ると、「市の様子の移り変わり」が目標値を下回っている。無回答の児童も多く、グラフから読み取れることをもとに、記述するという問題が苦手な児童が日頃の授業を見ている、多いことが要因として考えられる。
5年	基礎・活用ともに目標値を上回る結果となった。問題の内容別正答率では、どの分野においても、目標値を上回った。特に、「ごみのしやりと利用」「くらしをささえる水」では、全国平均正答率を5ポイント以上上回った。自分たちの生活に見近な事象であるため、理解が深まっていると考えられる。「都道府県の様子」では、目標値・全国平均は上回っているものの、区平均から4ポイント下回っているため、継続的に指導が必要と考える。
6年	基礎・活用ともに目標値及び全国平均を上回る結果となった。領域別の正答率においても、全ての領域で目標値を上回っており、社会的事象についての基礎的な知識・技能や、資料を活用して考察する力が概ね定着していることが分かった。

3 課題解決のための方策（取組指標）

4年	授業の中でグラフから分かることを記述するという経験を積ませ、資料を正確に読み取る力を定着させる。また、自分の考えを記述させる機会を多くとり、記述に対しての苦手意識を無くす。
5年	来年度も目標値を上回れるように「知識・技能」のより深い理解が課題となる。都道府県をはじめとした基礎的な知識などを反復して理解させていく。調べ学習などを通して、興味・関心や、学習意欲を高めながら、活用問題にも取り組ませ、学力の定着を図る。
6年	これまでの取組を継続し、基礎的な知識・技能の定着を図るとともに、資料を活用して社会的事象を多面的・多角的に考察する学習を充実させる。 具体的には、単元の学習過程において、地図、統計資料、写真、グラフなど複数の資料を比較・関連付けながら考える活動を設定し、資料を根拠として自分の考えを説明する機会を増やしていく。また、単元末には学習内容を社会との関わりから振り返る活動を取り入れ、知識を活用して課題解決につなげる力を育成する。

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【算数】

1 定着状況についての概要

分 類	2 年			3 年			4 年			5 年			6 年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基 礎	79.6	83.5	80.7	78.0	82.3	77.8	75.0	82.5	75.8	64.5	66.4	64.4	67.3	78.2	69.5
活 用	65.7	71.6	67.3	63.3	66.7	62.8	61.4	73.7	60.4	57.5	58.9	56.0	53.8	66.8	53.2

2 具体的な課題とその要因

2年	基礎、活用ともに目標値を上回っているが、問題内容別正答率を見ると、「120までの数」が目標値を下回っている。集合数と順序数の違いを捉えられていないと考えられる。
3年	全ての問題で目標値を正答率が上回る結果となった。特に「はこの形」の問題の正答率が 85.0 と高くなっている。一方で、「10000までの数・分数」の正答率が、71.6と一番低い結果となった。要因として、位ごとの数や具体的な点数を説明できなかったと考えられる。
4年	基礎、活用ともに目標値を上回っているが、問題内容別正答率を見ると、「長さ・重さ」の問題の正答率が、目標値を下回っている。道のりという意味の理解ができていないこと、また、地図からその道のりを読み取り、和を求めるということができなかったことが要因として考えられる。
5年	基礎・活用ともに目標値を正答率が上回っているが、「いろいろな形」「面積」で下回っている。また、問題の内容別正答率は、すべての領域において区平均を下回っていた。前学年までの学習内容の理解や定着が不十分であるため、得点できなかったと考えられる。
6年	全ての問題で目標値を正答率が上回る結果となった。また全ての問題で全国の平均よりも正答率が上回る結果となった。ベーシックドリルで間違えた問題をプリント課題として、各自で取り組ませていることによって、各学年の復習になり、学力の定着につながっていると考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

2年	数える対象と数える順番を分ける具体物操を操作する、経験を増やす。解くために必要な情報を問題文から確実に読み取ることを何度も経験させる。さらに視覚的に量と順序の違いを実感させましょう。
3年	数直線を多く使用し、100を基にした10000未満の数の大きさを考えさせたり、10000付近の数を讀んだりさせ、数の構成を捉えさせる指導を行う。
4年	道のりと距離の意味を理解させ、一人一人に説明させる等、意味理解を重視した指導を行い、実際に地図を用いた計算機会を増やす。
5年	算数の基礎基本となる内容を東京ベーシックドリル等を活用して、継続的に復習させる。文章問題等で、何を問われているかを読み取れるよう、授業内で繰り返し行い、問題に慣れさせるようにする。
6年	分数の計算や小数の計算など、計算のミスが起きないようにする指導を行う。

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【理科】

1 定着状況についての概要

分 類	4 年			5 年			6 年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基 礎	64.5	71.5	66.4	65.5	70.2	67.7	61.8	71.6	64.0
活 用	53.8	61.6	55.3	41.1	44.9	42.0	45.5	51.2	46.5

2 具体的な課題とその要因

4年	基礎、活用ともに目標値を上回る結果となった。問題内容別正答率を見ると、「音のせいしつ」の問題の正答率が、目標値を下回っている。糸電話の実験をイベントのように行ったり、糸をつまんだ際の音の伝わり方を理解できていなかったりしたことが要因として考えられる。
5年	誤答が多い設問を見ると大きく2つに分けられる。1つは「1年間の動物の様子」に関する問題、もう1つは理科の学習用語を問う問題である。動物の様子は学校内で実際に観察することができず、季節と生物の生態が一致していないことが原因とかがえられる。また、用語については授業内で一度扱った後に、再定着を図る場面がないことが原因と考えられる。
6年	基礎、活用ともに目標値を上回った。しかし、問題の内容別で見ると「ふりこのきまり」が目標値を下回っている。ふりこの一往復する時間の違いはふりこの長さによって生じることを、記述によって指摘する問題での誤答が多く、ふりこのきまりの理解が不十分なことが要因であると考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

4年	ただ実験を行うのではなく、使う器具や方法について複数回確認するとともに、実験の問題や計画を立てたり、結果や考察を自分の言葉でまとめたりする活動を繰り返し行っていく。
5年	生物を扱う単位では、直接生き物に触れる機会を設定できるように校内環境を整えたり、理科教員で連携を取りながら実物を用意したりする。学習用語については授業内で繰り返し指導すると共に、定期的に振り返り定着を図る。
6年	授業の中で、基礎的な知識の確認を繰り返し行うとともに、一人ひとりが操作すると記憶に残りやすくなることから実験の方法や場の数を工夫し全員が実験できるようにする。また、実験の意味理解を深められるように、学びを言語化し、実験計画の立案や考察を自分で表せるように指導する。

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【英語】

1 定着状況についての概要

分 類	6・年		
	目 標 値	校 内	全 国
基 礎	79.7	88.0	82.7
活 用	72.5	82.1	74.5

2 具体的な課題とその要因

6年

全ての問題で正答率が目標値を上回った。問題内容別の正答率を見ると、アルファベットの読みのみが全国平均を下回った。単語の聞き取り等の分野を苦手としている児童が多いことが要因として挙げられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

6年

日常の学習において、アルファベットや単語の聞き取りの活動を行う。単元末の表現の活動において、例文をもとにした応対の活動を意図的に行う。全体の学習のみではなく、練習動画等を活用し、児童が個別に練習できる環境づくりを行う。また、洋楽を聞きながら身振り手振りをつけるなど、英語に親しませるようにする。

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【国語】

1 定着状況についての概要

分 類	7 年			8 年			9 年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基 礎	67.4	75.2	68.7	62.6	68.9	64.6	62.1	70.6	64.2
活 用	50.0	56.7	53.9	51.9	59.6	52.2	53.8	61.1	55.1

2 具体的な課題とその要因

7年 目標値に対して校内平均正答率が下回っている問題はない。しかし、「言葉の特徴や使い方に関する事項」に関しては、他分野の領域が目標値を大きく上回っているのに対して、目標値を5.5ポイントしか上回っていない数値となっており、定着に課題があると考えられる。主な要因としては、基礎的な言語事項について理解はしていても、実際の読解や記述の場面で十分に活用できていないことや、語彙の習得状況に読書経験に個人差があることが挙げられる。

8年 全ての領域において、目標値に対して校内平均正答率が上回っているが、問題の内容別にみると「文法・語句に関する事項」が目標値より、0.8ポイント下回っており、語句の意味理解や文法事項の定着、文脈に応じて言葉を使う力に課題があると考えられる。要因として、文法・語句を意識的に学ぶ機会や反復練習の不足に加え、読書習慣の不足により、多様な語句や表現に触れる機会が少ないことが挙げられる。

9年 教科の正答率は「基礎」「活用」とともに目標値に対して校内平均正答率が下回っている問題はないが、問題の内容別にみると「漢字の書き取り」が目標値より、0.1ポイント下回っている。また、読み取りよりも正答率が低い。小テストやことのはノートによる学習を通して定着を図っているが、教科を問わず、タブレットを使用した学習が増え、漢字を手早く調べられるメリットがある一方で、手書きする機会が減っていることが定着しない要因の一つであると考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

7年 授業中にわからない言葉があった場合はノートの端にメモをさせ、後で調べさせることで語彙力の向上を促す。また、授業内でメディアセンターを活用したり、夏休みに読書感想文やPOP作成などに組みませたりして、読書習慣の定着を図っていく。

8年 文法ワークを活用した反復学習や理解度テストを計画的に実施し、生徒の定着状況を把握しながら、語句や文法事項を正しく理解し活用する力の向上を図る。また、読書に親しむ活動を増やし、読書への関心を高め、多様な本や言葉に触れる機会を広げ、語句や表現を理解し活用する力の向上を図る。

9年 「漢字の書き取り」については、小テストを引き続き実施する。また、文章を書く際には、適切な漢字を適宜使用するように促し、意識的に書く機会を増やし、使用漢字を増やしていく。

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【社会】

1 定着状況についての概要

分 類	7 年			8 年			9 年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基 礎	52.9	56.5	53.0	52.5	48.2	50.1	51.6	51.2	50.1
活 用	52.5	58.0	55.2	45.0	47.0	44.3	41.9	39.2	39.0

2 具体的な課題とその要因

- 7年 基本的にはほぼすべての項目で目標値および全国平均値を上回っている。しかし「日本の政治」は目標値より0.3ポイント下回っており、日本の政治への関心が低いと思われる。一方、活用の項目は5.5ポイント上回っており、既習知識を踏まえた活用というよりはその場での活用力が高いと考えられる。
- 8年 地理的分野については「日本の姿」、歴史的分野については「縄文から古墳時代」と年度初めに扱った内容が目標値より下回っている。これに加え、地理的分野の「世界の諸地域」に関しても目標値を下回っている現状がある。しかし、活用の正答率は目標値・全国よりも数値が高い一方で、基礎は低く、基礎的な知識の復習機会が不足していることが要因と思われる。
- 9年 地理的分野では、目標値を下回っているが、特に「地域調査の手法」において顕著に正答率が低い。歴史的分野では、目標値に対して「江戸時代」の正答率が高いが一方で「ヨーロッパ人との出会いと全国統一」において目標値よりも下回っている。地理的分野は、地形図を使う知識・技能の定着不足が考えられる。また、地理的分野・歴史的分野ともに基礎的な知識の復習の機会が足りていないことも要因である。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 7年 基礎基本の知識の定着を一層は図るために、毎時の復習や単元テストを活用していきたい。また、既習事項を踏まえた資料活用の機会を積極的に増やしていく。
- 8年 地理的・歴史的分野ともにこれまで通り、小テストや振り返りを行い、基礎・基本の定着を図っていく。また、既習知識を繰り返し使える機会を増やしていくことが重要である。これに加え、初見史料の活用力はこれまで通り、伸ばさせていく。その際にも、既習知識を根拠として、説明できる機会を設けていく。
- 9年 まず、授業内で扱った基礎・基本の反復練習を促し、その確認として各单元ごとに小テストを行う。そして、「なぜこのようなことになったのか」事象の原因や要因を考えさせ、説明できるよう授業内での機会を増やしていく。

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【数学】

1 定着状況についての概要

分 類	7 年			8 年			9 年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基 礎	64.8	73.5	65.7	60.2	66.8	61.1	58.3	69.1	57.9
活 用	59.3	70.0	61.6	47.1	50.8	44.5	44.3	56.0	45.8

2 具体的な課題とその要因

- 7年 領域別正答率では「図形」が目標値を5.7ポイント上回り、問題の内容別正答率では「平面図形」が3.9ポイント上回っている。しかし、他の項目と比較すると定着が不十分といえる。
- 8年 文字式において、数量の関係を式で表現したり、式の意味を読み取ったりする力に個人差が見られる。比例・反比例や図形の領域では、基本的な知識は定着しているが、複数の知識を関連付けて考える応用問題への対応力に課題がある。
- 9年 問題の内容別正答率では「2元1次方程式の解と座標の関係」が目標値を10.0ポイント下回っており、関数の式、表、グラフの相互関係を理解し、活用する力を身に付ける必要がある。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 7年 (1)実際の図形を観察する活動を通して、イメージする力を養う。
(2)見取図、展開図、平面図、立面図をかく活動を通して、表現力を養う。
(3)用語を正しく読み取ったり、使用したりできるような活動を充実させる。
- 8年 (1)文字式・方程式の学習において、数量関係を図や表と関連付けて説明する活動を設定する。
(2)比例・反比例、図形領域では、既習事項を活用する総合問題に定期的に取り組ませる。
- 9年 (1)関数の式、表、グラフの関係性を理解させる。
(2)グラフから必要な情報を読み取り、式や表に変換する力を身に付けさせる。
(3)方程式と関数の関係を理解させる。

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【理科】

1 定着状況についての概要

分 類	7 年			8 年			9 年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基 礎	53.3	56.2	52.3	53.3	58.1	53.2	49.5	46.5	47.3
活 用	46.0	53.9	48.5	44.0	50.5	46.4	35.5	34.8	32.4

2 具体的な課題とその要因

- 7年** 観点別正答率については「知識・技能」の目標値 52.3 に対し正答率 53.3、「思考・判断・表現」の目標値 49.3 に対し正答率 57.5 であった。観点別正答率の項目の「思考・判断・表現」も「知識・技能」は上回っている。しかし、領域別正答率をみると「動物のからのつくりとはたらき」や「水溶液の性質」領域が特に課題である。
- 8年** 観点別正答率については「知識・技能」の目標値 53.3 に対し正答率 56.4、「思考・判断・表現」の目標値 46.2 に対し正答率 54.6 であった。観点別正答率の項目の「知識・技能」、「思考・判断・表現」どちらも目標値を上回っている。領域別正答率をみると「水溶液の性質」領域が特に正答率が低く課題となる。基礎的な知識と実験操作を反復することで定着させることが課題である。
- 9年** 観点別正答率については「知識・技能」の目標値 49.7 に対し正答率 46.1、「思考・判断・表現」の目標値 38.5 に対し正答率 38.2 であった。「知識・技能」のより深い理解が課題となる。基礎的な知識と実験の操作方法などを反復して理解させ、定着させることが課題である。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 7年** 授業で観察、実験（演示実験も含）を多く取り入れ、自然や科学現象と触れる機会を増やすとともに、結果から考察することを繰り返し行うことで、思考力の向上を図る。また、身近な事象と結び付けて、調べ学習などを通して、興味・関心を高め、学習意欲を高める。
- 8年** 授業の中で関連する既習の内容も復習しながら、小テストやペアワークで基礎的な知識を確認する学習を行い、知識の定着を図る。また、身近な事象と結び付けて、調べ学習などを通して、興味・関心を高め、学習意欲を高める。
- 9年** 特に苦手意識の強い生物分野について7年生の内容から定期的に復習を行い、小テストなどを活用し、繰り返し学習を行う。特に「知識・技能」の観点目標値とのギャップが大きいため、知識の定着を目的とした小テストやペアワークを繰り返し行うことで定着度を高める。

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【英語】

1 定着状況についての概要

分 類	7 年			8 年			9 年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基 礎	76.4	88.9	79.4	51.7	61.3	52.3	54.7	59.5	53.7
活 用	67.5	77.6	70.9	48.2	58.5	48.0	45.9	51.7	46.4

2 具体的な課題とその要因

- 7年 「聞くこと、読むこと、書くこと」のいずれも目標値を超えているが、「書くこと」は前年度校内平均正答率を 5.2%も下回っている。どの内容（観点）も区の平均正答率を超えているが、「英作文」は、1.2%しか上回っていない。生徒が、単語のつづりと意味、場に応じた表現を一緒に理解できていないと考える。
- 8年 基礎・活用ともに目標値及び全国平均を上回った。一方で、「語形・語法の知識・理解」及び、「長文の読み取り」に課題が見られた。その要因として、文法事項を実際の言語活動の中で活用する場面や、長文を通して内容を捉える学習機会が十分ではなかったことが考えられる。
- 9年 「聞くこと、読むこと、書くこと」のいずれも目標値を超えているが、「場面に応じて書く英作文」に関しては目標値に届いておらず、「語彙の知識・理解」以外は区の平均正答率よりも下回っている。基礎的な事柄が定着できていないことと、場面に応じた作文などの実践的な発信の練習が足りていないことが要因と考える。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 7年 書く力を向上させるために、ワークシートを活用して、並べ替え問題や和文英訳の問題から英文を作成する練習をさせる。英文の作成に慣れてきたら、各単元の終わりに、教材に関連する題材から自分の考えや意見を3文で表現させる指導を行う。
- 8年 既習の文法事項を活用した、書く・話す活動を充実させるとともに、目的をもって長文を読む活動を継続的に取り入れ、文法の活用力及び読解力の向上を図る。また、文章の要点を捉えたり、内容を根拠をもって説明したりする活動を取り入れ、思考力・判断力・表現力の育成につなげる。
- 9年 ワークシート等を活用して、基礎的な文法事項や表現の理解と定着を図る。ふだんの音読指導や読解指導を通して、自力で読む力や情報を整理しながら読む力を育てるほか、意見を伝えたり質問に答えたりする活動を通して、場面に応じた発信力を高めていく。